

# Eureka VI

六年制通信 No. 19 平成30年10月20日(土)号

## 心が折れる？

心が折れる。最近あちこちでよく聞く言葉です。昔はギリギリの闘いをしているスポーツ選手がよく使っていたと思いますが、いつのまにか私たちの生活の中でも散見されるようになりました。これは女子プロレスラーの神取さんが使ったのが最初らしいですね。それも自分の心ではなくて「相手の心を折ってやる」という使い方だったらしいですけど。

それはともかく、この「心が折れる」を今では多くの人が実に気軽に使っているように思いますが、私の錯覚でしょうか。ちょっとした挫折（とも言えないくらいの失敗）に直面してもすぐに「心が折れた」と表現するらしい。ちょっとしたストレスにすら耐えきれない自分の弱さを、かっこよく言っているだけのような気がして、嫌いだなあ、こういう風潮は。まあ、言葉は本来の意味から変遷していきますから仕方ないのですが、この表現は本当にもう立ち直れないくらいの場面でしか使うべきではないと思います。

先日、NHKで女子バレーの中田久美日本代表監督の特集を観ていたら、「心なんて折れてなんぼです。そこからいかに立ち上がっていくか。何度でも折れていい。その度に立ち上がることが大切」という話がありました。ああいう人が言うと私は素直に聞けます。長い時間を、それこそ人生をかけて戦ってきた人が大きな怪我で試合に出られないとか、そんな経験を重ねた人が、それでももう一度立ちあがるわけです。おそらく失敗があるたびに、心を折るまいと懸命の努力をされたでしょうし、絶望も味わったはずです。そういう人が若い頃の葛藤を振り返って「心は折れていい。立ち直ればいい」と言うのは大きな意味がありますね。この言葉には「心を折ってはいけない」と懸命に闘った人の経験がつまっているように思うからです。

ですから、何か目標を持って、時間をかけて準備をして、日々努力を重ねている人の言葉として使ってほしいですね。「心が折れる」なんていう表現は、時間をかけた努力の背景も持たず使っていない言葉ではないと思います。

しかし、私たちの日常にも、「心が折れる」ほど大それたことではないにしろ、もう嫌になってしまう場面、やる気を失う出来事などはたくさんあります。小さな挫折はあちこちどころがっています。そんなとき昔は、頑張って乗り越えよと言っていたのですが、最近は「頑張れ！」というと相手を追い詰めるからいけないんですってね。こういう風潮も嫌いや。君たちが弱音を吐くことを歓迎するような風潮ね。自分は悪くない、全部まわりが悪い、友だちが悪い、上司が悪い、環境が悪い、という発想を

許すどころか正しいかのように若者に教える風潮もありますね。大嫌いやわ。

だいたい、すぐに投げ出す人や最後までできない人、すぐ言い訳する人、たいしたことでもないのに「心が折れた」と言う人には特徴がありますね。

まず、根拠のない自信を持っている。従って、初めから自分のことを過大評価している。そう思います。自信というのは何事かを自分の力で成し遂げて初めて身につくものですが、何の実績もないのに自分は何でもできると思っている人がいます。こういう人は、自分がどう見られるかを異常に気にしますから、失敗する前に撤退する方を選びます。その際、自分以外に失敗の原因を探ります。一番進歩しないパターンですね、かわいそうに。次に、都合の良い勝手な結果を描きすぎる。しかも、早く結果を求める。そういう傾向があります。こんなはずではなかった、と言う人の多くはこのパターンです。どんなはずだと思っていたのか。要するに現状分析も甘く、結果にいたる努力も怠っている場合が多いのではないかと思います。こういう人も、失敗の原因は自分以外に求めます。反省できないタイプですね。

これらは、正直さに欠けることが原因だと私は思っています。自分をちゃんと見ていない。自分の実力を理解していない。それは自分以外の者に対する敬意を失わせませす。自分とも他人とも正直に向き合っていないからです。

さらにもう一つ、実力をつけるための努力の量を見誤っている。実力をつけるには長い時間が、しかも継続して努力する必要があることをわかっていない。地道な努力をバカにする人はこのタイプですね。よく「今はできないが大学に入ったらちゃんと勉強する」なんて言う人がいるでしょう。こういう思考に陥ってはいけませんね。今現在の努力のできない人が、明日できるわけがない。努力とは辛抱強さを必要とする地道な継続です。そこから逃げる精神が脆弱な若者をつくっているように私は思いません。君たちには強い精神を持った若者になってほしい、心からそう願います。

### 今週のおすすめ

・ソポクレス 『オイディプス王』 (岩波文庫 藤沢令夫訳)

ソポクレスはギリシア三大悲劇詩人の一人。オイディプスはテーバイの王で、自分の父で先王のライオスを殺した犯人を探索するが…。

この物語のモチーフは、神託(=神のお告げと考えていいでしょう)を逃れようとする行為が、結局は神託通りの現実を作ってしまうということだと思います。現代のドラマでもよく使われるモチーフですよ。ネタバレになってしまうのでこれ以上は書きません。非常に読みやすい短編ですから読んでみて下さい。

オイディプスは「腫れた足」という意味。これも物語を読めば、納得できます。オイディプスの「プス」のところが「足」の意味で、現代英語の *pedal* や *pedestrian* の *ped* の語源に当たります。

また、フロイトのエディプス・コンプレックスの「エディプス」がオイディプスのことです。これも物語を読んだ後に調べてごらん。なるほどなあと思いますよ。

BGMはサイモン&ガーファנקルの 明日に架ける橋 でした…。